

Ⅷ. 気になる子どもと保護者(気になる行動や発達の遅れ等)について、どのような理由による可能性が高いと考えられますか。主たる理由に◎、該当するものすべてに○を付けてください。

A 子どもの要因

- 1. 低体重出生
- 2. 身体障害(目、耳、手指など)
- 3. 知的障害
- 4. 疾患
- 5. ストレス
- 6. 気質・性格的なもの(神経質など)
- 7. 経験不足
- 8. 適応力が低い
- 9. 保育になじめない
- 10. 理由不明だが子どもの原因
- 11. その他 ( )

B 保護者の要因

- 1. 精神疾患など
- 2. 身体疾患など
- 3. 知的障害など
- 4. 身体障害など
- 5. ストレス
- 6. 性格的なもの
- 7. 親としての成熟度の低さ
- 8. 人間関係の成熟度の低さ
- 9. 生活の余裕の無さ
- 10. 理由不明だが保護者の原因
- 11. その他 ( )

C. かかわりの要因

- 1. 子どもと保護者のかかわりが極めて乏しい
- 2. 子どもと社会とのかかわりが極めて乏しい
- 3. 子どもと保育士とのかかわりがうまく適合しない
- 4. 保護者のかかわりに偏りがある
- 5. 保護者のかかわりに虐待傾向がある
- 6. 保護者のかかわりが過干渉である
- 7. 理由不明だがかかわりの原因
- 8. その他 ( )

D. 保護者をとりまく環境の要因

- 1. 他者からのサポートの不足
- 2. 夫婦、家族、親族などのストレス
- 3. 近隣とのストレス
- 4. 職場とのストレス
- 5. 他者からの過剰な干渉
- 6. 不安定な生活
- 7. 劣悪な物理的環境条件
- 8. 理由不明だが環境の要因
- 9. その他 ( )

# 子どもの食と生活に関するアンケート

次の質問を読み、回答欄からあてはまる記号に1つだけ○印をつけて下さい。( )にはご意見をお書き下さい。  
 お子さん一人ずつについてお答えください。低年齢のお子さんは、該当する項目についてお答えください。

**お子さんの食事についておたずねします。**

お子さんの年齢はいくつですか？ ( )歳 ( )か月

Q1. お子さんの日常生活の時間をお答えください。特に決まっていない場合は( )内に×をお書きください。

- ①起きる時刻 平日午前( )時頃 休日午前( )時頃      ②寝る時刻 平日午後( )時頃 休日午後( )時頃  
 ③朝食時刻 平日午前( )時頃 休日午前( )時頃      ④夕食時刻 平日午後( )時頃 休日午後( )時頃

Q2. お子さんは朝食を食べていますか。

- 1)ほぼ毎日食べる      2)週に4, 5日食べる      3)週に2, 3日食べる      4)ほとんど食べない

Q3. お子さんは、食事を誰と一緒に食べますか。

- ①平日 朝食 1)家族全員で 2)家族の一部と 3)子ども達だけで 4)一人で 5)その他( ) 6)食べない  
 ② 夕食 1)家族全員で 2)家族の一部と 3)子ども達だけで 4)一人で 5)その他( ) 6)食べない  
 ③休日 朝食 1)家族全員で 2)家族の一部と 3)子ども達だけで 4)一人で 5)その他( ) 6)食べない  
 ④ 夕食 1)家族全員で 2)家族の一部と 3)子ども達だけで 4)一人で 5)その他( ) 6)食べない

Q4. 1歳のお誕生を迎えられたお子さんについて、お答えください。

朝食と夕食について、主食・主菜・副菜のある食事はどのくらいありますか。あてはまる頻度の番号に○印をつけて下さい。

	主食 (ご飯やパン・めん類などの穀類を主材料とした料理)	主菜 (肉・魚・卵・大豆製品を主材料とした料理)	副菜 (野菜・芋・海草・きのこなどを主材料とした料理)	牛乳・乳製品	果物
朝食	1)毎日 2)週に5, 6回 3)週に2~4回 4)週に1回以下 5)まったく食べない				
夕食	1)毎日 2)週に5, 6回 3)週に2~4回 4)週に1回以下 5)まったく食べない				

Q5. お子さんは間食をいつ食べますか。複数ある場合はすべてに○をつけてください。

- 1)起床から朝食前      2)朝食後から登園まで      3)降園から夕食まで      4)夕食後      5)その他( )

Q6. お子さんは間食にどのような食べ物をよく食べていますか。よく食べるもの3つに○をつけてください。

- 1)ポテトチップスなどのスナック菓子      2)チョコレート      3)あめ・キャンディー類      4)クッキー類      5)アイスクリーム      6)ケーキ  
 7)プリン      8)ジュース      9)牛乳      10)ヨーグルト・乳酸菌飲料      11)チーズ      12)パン・サンドイッチ      13)ハンバーガー・ピザ  
 14)おにぎり等の飯類      15)せんべい      16)麺類      17)お好み焼き      18)甘い和菓子      19)果物      20)スポーツ飲料など  
 21)その他( )

Q7. お子さんと一緒に外食をすることがありますか。

- 1)週に2, 3回以上ある      2)週に1回程度ある      3)月に1, 2回程度ある      4)2~3か月に1回程度ある      5)まったくない

Q8. お子さんはテレビやビデオを見ていますか。

- 1)見ていない      2)時々見ている      3)いつも見ている      Q どのくらい見せていますか。一日( )時間

Q9. 食事中、お子さんはテレビやビデオを見ていますか。

- 1)見ていない      2)時々見ている      3)いつも見ている

Q10. お子さんは歯磨きしますか。

- 1)ほぼ毎食後      2)1日に一回      3)あまりしない      4)ほとんどしない

Q11. お子さんの排便の頻度はどのくらいですか。

- 1)ほぼ毎日排便がある      2)2, 3日に1回程度      3)4, 5日に1回程度      4)わからない

ご家庭での子どもの食事での関わりについておたずねします。

Q12. 次の各項目について、「とてもよくあてはまる」という場合には5に、「まあ、あてはまる」という場合には4に、「どちらともいえない」という場合には3に、「あまりあてはまらない」という場合には2に、「全くあてはまらない」という場合には1に○をしてください。現在の子どもの年齢では該当しない場合にも、1に○をつけてください。

	とてもよくあてはまる	まあ、あてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	
(例)	5	4	3	2	1	
(1) 食事の前に身体を動かして遊ぶ時間を十分に確保している	5	4	3	2	1	(1)
(2) 子どもと一緒に動物の飼育をする	5	4	3	2	1	(2)
(3) 子どもと一緒に栽培・収穫をする	5	4	3	2	1	(3)
(4) 食べものによる自然の恵みに、感謝の気持ちを持たせる	5	4	3	2	1	(4)
(5) 子どもの食べたいものをとりいれている	5	4	3	2	1	(5)
(6) 子どもと一緒に、食材の買い物、下準備をする	5	4	3	2	1	(6)
(7) 子どもと一緒に調理をする	5	4	3	2	1	(7)
(8) 子どもと一緒に、配膳・後片付けなどをする	5	4	3	2	1	(8)
(9) 食材の色、形に触れたり、匂いをかいだりする	5	4	3	2	1	(9)
(10) 食べものについての話をする	5	4	3	2	1	(10)
(11) 食事の前と後のあいさつをする	5	4	3	2	1	(11)
(12) 子どもと一緒に食事をする	5	4	3	2	1	(12)
(13) 食事中に、子どもに話しかける	5	4	3	2	1	(13)
(14) スプーンやフォークの正しい使い方を教える	5	4	3	2	1	(14)
(15) 箸の正しい使い方を教える	5	4	3	2	1	(15)
(16) 子どもの食欲に応じて、食事量を調節している	5	4	3	2	1	(16)
(17) 子どもが食べるのに時間がかかっても急がせない	5	4	3	2	1	(17)
(18) 子どもが自分で食べようとするのを大切にする	5	4	3	2	1	(18)
(19) 嫌いなもの、食べられないものでも、残さず食べさせる	5	4	3	2	1	(19)
(20) 安全で、いろいろな種類の食材で食事をつくっている	5	4	3	2	1	(20)
(21) 行事食や、食材の旬や季節感をいかした食事をつくっている	5	4	3	2	1	(21)
(22) 食材に地域の特産物を使ったり、郷土食をつくっている	5	4	3	2	1	(22)
(23) 子どもにあった材質や形などの食器を使っている	5	4	3	2	1	(23)
(24) 子どもの友達やその家族、親戚などの家族以外の人と一緒に食	5	4	3	2	1	(24)
(25) 食事の後にうがい・歯磨きをさせる	5	4	3	2	1	(25)
(26) 子どもの生活リズムにあった睡眠時間を確保している	5	4	3	2	1	(26)

あなたご自身についておたずねします。

Q13. あなたの年代に○をつけてください。

- 1)10代                      2)20代                      3)30代                      4)40代                      5)50代以上

Q14. あなたと保育園を利用するお子さんとの関係に○をつけてください。

- 1)母親                      2)父親                      3)祖母                      4)祖父                      5)その他(                      )

Q15. ご両親の身長体重を教えてください。

- 1)父親(代わりとなる方) 身長(                      )cm 体重(                      )kg  
2)母親(代わりとなる方) 身長(                      )cm 体重(                      )kg

Q16. お住まいはどのような地域ですか。

- 1)住宅地域                      2)商店の多い地域                      3)工場の多い地域                      4)田園地域                      5)その他(                      )

Q17. 現在、あなたは、朝食を食べていますか。

- 1)ほぼ毎日                      2)週に4, 5日                      3)週に2, 3日                      4)ほとんど食べない

主食はご飯やパン・めん類などの穀類を、主菜は肉・魚・卵・大豆製品を、副菜は野菜・芋・海藻・きのこなどを主材料とした料理です。

Q18. あなたは、主食・主菜・副菜のそろった食事をどのぐらいの頻度でとっていますか。

- 1)毎食                      2)日に2食以上                      3)日に1食                      4)あまりない                      5)全くない

Q19. 現在、次のような学習の機会や情報が得られていますか。

「十分に得られている」という場合には5に、「まあまあ得られている」という場合には4に、「どちらともいえない」という場合には3に、「あまり得られていない」という場合には2に、「全く得られていない」という場合には1に○をしてください。

	十分に得られている	まあまあ得られている	どちらともいえない	あまり得られていない	全く得られていない	
a) 子どもの食に関わる要望を、家庭から保育所に伝える機会(懇談会	5	4	3	2	1	a)
b) 園だよりや連絡帳によるお子さんの食の情報(保育所での食の取り組みを含む)	5	4	3	2	1	b)
c) 食品会社、食料品店や外食店からの、子どもの食についての情報	5	4	3	2	1	c)
d) 食料品店や外食店による、栄養面・安全面など、子どもに適したメ	5	4	3	2	1	d)
e) 地域での、子どもが食べものの栽培や収穫に関わる機会	5	4	3	2	1	e)
f) 市内で生産された農産物や特産物を食べる機会	5	4	3	2	1	f)
g) 保健所や保健センターによる、子どもの食の情報や、講習会・料理教室などの学習の機会	5	4	3	2	1	g)

Q20. 今後、次のような学習の機会や情報が欲しいですか。

「大変欲しい」という場合には5に、「少し欲しい」という場合には4に、「どちらともいえない」という場合には3に、「あまり欲しくない」という場合には2に、「全く欲しくない」という場合には1に○をしてください。

	とても欲しい	少し欲しい	どちらともいえない	あまり欲しくない	全く欲しくない	
a) 子どもの食に関わる要望を、家庭から保育所に伝える機会(懇談会	5	4	3	2	1	a)
b) 園だよりや連絡帳によるお子さんの食の情報(保育所での食の取り組みを含む)	5	4	3	2	1	b)
c) 食品会社、食料品店や外食店からの、子どもの食についての情報	5	4	3	2	1	c)
d) 食料品店や外食店による、栄養面・安全面など、子どもに適したメ	5	4	3	2	1	d)
e) 地域での、子どもが食べものの栽培や収穫に関わる機会	5	4	3	2	1	e)
f) 市内で生産された農産物や特産物を食べる機会	5	4	3	2	1	f)
g) 保健所や保健センターによる、子どもの食の情報や、講習会・料理教室などの学習の機会	5	4	3	2	1	g)

Q21. 次のことについて、「とてもよくあてはまる」という場合には5に、「まあ、あてはまる」という場合には4に、「どちらともいえない」という場合には3に、「あまりあてはまらない」という場合には2に、「全くあてはまらない」という場合には1に○をしてください。

	とてもよくあてはまる	まあ、あてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	
a) 十分な時間をかけて、ゆとりをもった食事をしている	5	4	3	2	1	a)
b) できあいの惣菜や冷凍食品を、よく使う	5	4	3	2	1	b)
c) 食事をうす味にしている	5	4	3	2	1	c)
d) おいしく楽しくきちんと食べることに、とても心がけている	5	4	3	2	1	d)
e) 食事を作ることが、とても好きだ	5	4	3	2	1	e)
f) 子どもの適切な食事を、十分に理解している	5	4	3	2	1	f)
g) バランスのとれた子どもの食事の与え方を、十分に理解している	5	4	3	2	1	g)
h) 子どもの発達に応じた食べ方を、十分に理解している	5	4	3	2	1	h)
i) 子どもの食事に大変関心がある	5	4	3	2	1	i)
j) 市内で生産された農産物を、とても利用している	5	4	3	2	1	j)
k) 子どもの食に関する情報を、積極的に入手している	5	4	3	2	1	k)

**お子さんとのかかわりについておたずねします。**

Q22. 1日にお子さんと向き合っ一緒に遊ぶ時間は、どれくらいとれますか。(但し、睡眠時間は除く)

- 1)平日 約 時間 分      2)休日 約 時間 分

Q23. お子さんと一緒に遊ぶ機会(子どもと向き合っ過ごすこと)は、どのくらいありますか。

- 1)めったにない    2)1週に1~2回    3)1週に3~4回    4)1週に5~6回    5)ほぼ毎日    6)その他( )

Q24. お子さんに本を読み聴かせる機会は、どのくらいありますか。

- 1)めったにない    2)1月に1~2回    3)1週に1~2回    4)1週に3~4回    5)ほぼ毎日    6)その他( )

Q25. あなたは童謡やお子さんの好きな歌を一緒に歌いますか。

- 1)めったにない    2)1月に1~2回    3)1週に1~2回    4)1週に3~4回    5)ほぼ毎日    6)その他( )

Q26. お子さんと公園に行く機会は、どのくらいありますか。

- 1)めったにない    2)1月に1~2回    3)1週に1~2回    4)1週に3~4回    5)ほぼ毎日    6)その他( )

Q27. お子さんと同じくらいの年齢の子どもを持つ友人や親戚と、どの程度の頻度で訪問したりされたりしますか。

- 1)めったにない    2)1月に1~2回    3)1週に1~2回    4)1週に3~4回    5)ほぼ毎日    6)その他( )

Q28. お父さん(お母さん)(または父親(母親)代わりとなる方)は、どの程度協力的ですか。

- 1)めったにない    2)1月に1~2回    3)1週に1~2回    4)1週に3~4回    5)ほぼ毎日    6)その他( )

Q29. お子さんが両親(または母親、父親の代わりとなる方)と一緒に食卓を囲んで食べるのは何回くらいですか。

- 1)めったにない    2)1月に1~2回    3)1週に1~2回    4)1週に3~4回    5)ほぼ毎日    6)その他( )

Q30. お子さんがわざと牛乳をこぼしたら、どうしますか。あてはまるものひとつに○を付けてください。

- 1)子どもをたたく    2)口でしかる    3)何等かの方法で悪いことをわからせる(内容; )  
4)別の方法でこぼさないように考える    5)その他( )

Q31. 先週は何回くらいお子さんをたたいたりしましたか。

- 1)たたかない    2)1~2回位    3)3~4回位    4)4~5回位    5)ほぼ毎日    6)その他( )

Q32. 夫婦(または母親、父親の代わりとなる方)で子どもの話をする時間は、どの程度とれますか。

- 1)ほとんどとれない    2)1か月に1回位    3)週に1~2回位    4)週に3~4回位    5)ほぼ毎日    6)その他( )

Q33. 保育園以外に、お子さんの面倒を見てくれる人がいますか。

- 1)いない    2)いる→それは誰ですか。あてはまるすべての番号に○を付けてください。  
1)配偶者(かわりの方)    2)祖父母    3)友人    4)親戚    5)隣人    6)ベビーシッター    7)その他( )

Q34. 子育てについて誰か相談できる人がいますか。

- 1)いない    2)いる→それは誰ですか。あてはまるすべての番号に○を付けてください。  
1)配偶者(かわりの方)    2)祖父母    3)友人    4)親戚    5)隣人    6)保育士    7)園長    8)その他( )

- Q35. 育児に自信がもてないことがありますか。  
 1)はい 2)いいえ 3)何ともいえない
- Q36. 子どもを虐待しているのではないかと思うことがありますか。  
 1)はい 2)いいえ 3)何ともいえない
- Q37. お母さんはゆっくりとした気分でお子さんと過ごせる時間がありますか。  
 1)はい 2)いいえ 3)何ともいえない
- Q38. お父さん(お母さん、または父親(母親)代わりとなる方)は育児に参加してくれますか。  
 1)よくやっている 2)時々やっている 3)ほとんどしない 4)何ともいえない
- Q39. 生活や仕事に、目標がもてますか。  
 1)大変もてる 2)ややもてる 3)どちらともいえない 4)あまりもてない 5)全くもてない
- Q40. 保育所で親同士の連帯感を感じますか。  
 1)大変感じる 2)やや感じる 3)どちらともいえない 4)あまり感じない 5)全く感じない
- Q41. お子さんは保育園に行くのを楽しみにしていますか。  
 1)大変楽しみにしている 2)まあ楽しみにしている 3)どちらともいえない 4)あまり行きたがらない 5)嫌がっている
- Q42. お子さんは家庭での食事を楽しみにしていますか。  
 1)大変楽しみにしている 2)まあ楽しみにしている 3)どちらともいえない 4)あまり楽しんでいない 5)全く楽しんでいない
- Q43. お子さんは健康だと思いますか。  
 1)大変健康 2)まあ健康 3)どちらでもない 4)あまり健康でない 5)健康ではない
- Q44. お子さんを出産した時、母親の体重は妊娠前に比べて、どのくらい増えましたか。  
 1)7kg未満 2)7～12kg 3)12kg以上
- Q45. お子さんが生まれた時の出生体重はどのくらいでしたか。  
 1)2500g未満 2)2500g以上
- Q46. お子さんが生後1か月頃の授乳方法についてお答えください。  
 1)母乳 2)育児用ミルク 3)母乳と育児用ミルクの混合
- Q47. 3歳以上の子どもについてお答えください。

現在、もしくは過去6か月以内の状態について、以下の項目に「確かにあてはまる」という場合には4に、「ややあてはまる」という場合には3に、「あまりあてはまらない」という場合には2に、「全くあてはまらない」という場合には1に○をしてください。

確かにあてはまる  
 ややあてはまる  
 あまりあてはまらない  
 全くあてはまらない

(1) 集中力がなく、一つの事に注意が持続しない	4	3	2	1	(1)
(2) じっと座ってられない、落ち着きがない、または多動である	4	3	2	1	(2)
(3) 衝動的でよく考えずに行動する	4	3	2	1	(3)
(4) 短気、かんしゃくを起こしやすい	4	3	2	1	(4)
(5) とても騒がしい	4	3	2	1	(5)

Q48. 保育所給食への要望をお書きください。

( ..... )  
 ( ..... )  
 ( ..... )

Q49. あなたがお子さんの食事について欲しい情報をお書きください。

( ..... )  
 ( ..... )  
 ( ..... )

Q50. 親子で参加したい「食」に関わるイベントや事業のアイデアがありましたら、お書きください。

( ..... )  
 ( ..... )  
 ( ..... )

ご協力ありがとうございました。大変お手数ですが、もう一度、記入漏れがないかご確認下さい。

大項目	中項目	小項目	保育者による回答	保護者による回答	
子ども	属性	生年月日	フェイスシート		
		担当クラス	フェイスシート		
		性別	フェイスシート		
		課税	フェイスシート		
		家族構成	フェイスシート		
		就業形態	フェイスシート		
		家族の職業	フェイスシート		
		家族の教育歴	フェイスシート		
		国籍	フェイスシート		
		保育所での保育時間	フェイスシート		
	保育環境 出生時の状況	出生時の母親の体重変化			44
		低出生体重			45
		母乳育児の状況(出産後1か月、6か月時)			46
	QOL	保育所での生活の楽しみ			41
		食事の楽しみ			42
	健康状態	身体発育	身長	I 1	
			体重	I 2	
疾病		主観的健康観		43	
		う蝕の保有	I 3		
		アトピー性皮膚炎、ぜんそくの有無	I 4,6		
発達		運動発達	III		
		社会性発達	III		
		言語発達	III		
		気になる行動	VI		
		気になる子どもと保護者による理由	VIII		
		注意欠陥多動性傾向(家庭・保育所両方)	V	47	
家庭でのライフスタイル	生活リズム	起床時刻		1①	
		就寝時刻		1②	
		朝食喫食時刻		1③	
		夕食喫食時刻		1④	
		生活習慣	歯磨き習慣の有無		10
			規則的な排便の有無		11
		食べる行動	朝夕別、料理郡別摂取頻度		4
			朝食の摂食状況		2
			朝食・夕食での共食状況		3
			間食の摂食状況		5
			間食の内容		6
			外食の頻度		7
			テレビ、ビデオの視聴頻度		8
		食事行動の評価	食事中のテレビ、ビデオの視聴頻度		9
食事行動の評価		お腹がすぐリズムができています	II (1)		
		食べたいもの、好きなものが増えている	II (2)		
		先生や友達など、一緒に食べたがる	II (3)		
		食事づくりや準備にかかわろうとする	II (4)		
		食べものを話題にする	II (5)		
		食事中の姿勢・マナーが良い	II (6)		
		よく噛んで食べる	II (7)		
		食具を上手にを使って食べる	II (8)(9)		
		挨拶を自分から進んでする	II (10)		
		食べる量が適切である	II (11)		

大項目	中項目	小項目	保育者による回答	保護者による回答		
保護者	属性	年齢		13		
		アンケート回答者の立場		14		
	環境	居住環境		16		
	健康	両親の身長、体重		15		
	QOL	生きがい 情報の受発信 育児への自信	生活や仕事に、はりの有無		39	
			保育所で親同士の連帯感の認識		40	
			育児への自信		35	
			子どもの虐待への認識		36	
	ライフスタイル		ゆっくりとした気分で過ごす時間		37	
	育児環境	親子のかかわりの頻度	一日に子どもと一緒に遊ぶ時間		22	
			子どもと一緒に遊ぶ機会		23	
			子どもに本を読み聞かせる機会		24	
			子どもと一緒に歌を歌う機会		25	
			夫(または、それに代わる人)の育児協力の機会		28	
			家族で食事をする機会		29	
			制限や罰の回避	子どもの失敗への対応		30
				一週間のうち子どもを叩く頻度		31
			社会的かかわりの頻度	子どもを公園に連れて行く機会		26
				子ども同伴の知人との交流の機会		27
			社会的サポート	配偶者の育児参加の有無		38
		育児支援者の有無		33		
		育児相談者の有無		34		
		夫(または、それに代わる人)と子どもの話をする機会		32		
	家庭での子どもへの食育	食と健康	身体を動かす遊び時間の確保		12(1)	
			嫌いなものでも残さず食べさせる		12(19)	
			食欲の個人差の尊重		12(16)	
			早く食べるように急がせない		12(17)	
			子どもが自分で食べようとすることを尊重する		12(18)	
			食事後の歯磨きをさせる		12(25)	
			睡眠の時間の確保		12(26)	
			食べもの、栄養・健康の情報伝達をする		12(10)	
			多様な食材を用いた食事の提供		12(20)	
食と人間関係			子どもと一緒に食べる		12(12)	
			食事中、子どもに話かける		12(13)	
			家族以外の人との食事		12(24)	
食と文化			食具の使い方を教える		12(14)(15)	
			あいさつをさせる		12(11)	
			行事や旬をいかした食事の提供		12(21)	
			特産物をいかした食事の提供		12(22)	
			食器を配慮した食事の提供		12(23)	
			いのちの育ちと食	飼育に関わらせる		12(2)
				栽培・収穫に関わらせる		12(3)
料理と食	動植物からの自然の恵みに、感謝の気持ちを持たせる		12(4)			
	準備と片付けに参加させる		12(8)			
	食材の買い物、下準備に子どもに関わらせる		12(6)			
	食材の色、形に触れたり、匂いをかいだりする機会を設ける		12(9)			
	子どもを調理に関わらせる		12(7)			
	子どもの要望の取り入れ		12(5)			
食行動	食べる行動	朝食の摂食状況		17		
		栄養バランスのとれた食事の摂食状況		18		
	作る行動	十分な時間をかけてゆとりを持った食事		21a)		
		うす味の食事		21c)		
	食情報の入手	できあいの惣菜や冷凍食品の利用		21b)		
		地元で生産された農産物の利用		21j)		
	子どもの食に関する情報の入手		21k)			
食知識		子どもの適切な食事量に対する知識		21f)		
		子どもの適切な食事内容に対する知識		21g)		
		子どもの食行動の発達に対する知識		21h)		
食態度		食への関心		21i)		
		おいしく楽しく食べることへの心がけ		21d)		
		食事づくりスキル		21e)		
		保育所給食への要望		48		
		子どもの食事について欲しい情報		49		
		参加したいイベントや事業のアイデア		50		
	子どもの食育に関する情報・学習の場へのニーズ		19			
子どもの食育のための保育所・地域の食環境		子どもの食育に関する情報・学習の場の提供の有無		20		

### 3. 食育と注意欠陥多動傾向との関連

分担研究者 榊原 洋一 お茶の水女子大学 教授  
研究協力者 安治陽子 東京大学大学院

#### 研究要旨：

3～5歳児の保護者を対象に、食に関する項目と注意欠陥多動傾向との関連を検討した。その結果、肥満度が高いほど、生活リズムの混乱度が高いほど、食事のマナーが良い子どもほど、テレビを見ていない子どもほど、有意に注意欠陥多動性スコアが高いことが明らかになった。このように、食と、肥満、生活リズム、食事の姿勢やマナー、食事のテレビ視聴と有意な関連がみられた。

#### A. 研究目的

通常学級に通う小中学生の6.3%に、集中できない、多動傾向がある、集団に入れないなどの、特別な支援を要する児童生徒がいることが文部科学省の調査で明らかになり、大きな社会的問題となっている。こうした子どもたちの持っている行動特性は発達障害と呼ばれる診断カテゴリーに含まれる。

通常学級に通う発達障害は、知的障害を伴わないことから「軽度」発達障害と呼ばれているが、その主体は注意欠陥多動性障害（ADHD）、学習障害（LD）、そして高機能自閉症、アスペルガー症候群である。これらの軽度発達障害の発症には遺伝的な要因があるとされているが、幼少時からの成育環境によってその状態が大きく変容する可能性が指摘されている。

注意欠陥多動性障害は、全小児の3%に見られるとされる頻度の高い発達障害であるが、成育環境によってその症状が大きく変容することが報告されている。ADHDの診断基準として広く認められているDSM-IVの基準を表1に示すが、その個々の症状を見ても明らかのように、日常生活行動全般を順序だててきちんと行うことが不得手であるのが特徴のひとつになっている。日常生活の

基本的な習慣を身につける乳幼児期の環境が、ADHDの子どもの症状の進展に大きな影響をあたえていることが予想される。

乳幼児の日常生活リズムを形成する要因としては、睡眠、食事が主要なものであることから、こうした生活リズムが、子どもの注意欠陥多動行動に与える影響を研究することは、ADHDの進展に関する知見として重要なだけでなく、生活リズム変容によるADHD児への治療的介入方法に関する重要な示唆を与えるものである。

本研究では、乳幼児の食事、睡眠リズムの実態と、注意欠陥多動行動との関係を明らかにすることを目的とする。

#### B. 研究方法

研究対象児は、満3歳以上児である。研究方法は研究2と同様である。

子どもの注意欠陥多動傾向の尺度は、保育士（研究2の資料1、有効回答1,794名）、保護者（研究2の資料2、有効回答1,764名）を対象に、世界的に使用されているCBCL（Child Behavior Check List）<sup>1)</sup>のなかから、幼児期に使用できる5項目（4段階尺度）を両調査票に設定し、その平均値を合成変数として算出して「注意

欠陥多動性スコア」とし、さまざまな因子との相関関係をANOVAで統計的に解析した。

質問紙調査に含まれる子どもの食生活を主体とした因子間には、さまざまな程度の交絡があると考えられるが、まずそうした交絡についての検討をくわえずに、それぞれの因子を独立とみなして、因子と注意欠陥、多動傾向の尺度との相関関係を解析した。

## C. 研究結果

### 1. 保護者の回答による注意欠陥多動傾向 (表2)

注意欠陥多動傾向の5項目について「確かにあてはまる」と回答した者は、「集中力がなく、一つの事に注意が持続しない」では保護者で、保護者で全体の6.7%、保育士で6.7%、「じっとしてられない、落ち着きがない、または多動である」では保護者で9.3%、保育士で5.4%、「よく考えずに行動する」では保護者で5.6%、保育士で5.4%、「短気、かんしゃくを起こしやすい」では保護者で9.8%、保育士で6.2%、「とても騒がし」では保護者で11.4%、保育士で5.3%であった。

### 2. 性・年齢別 保護者の回答による注意欠陥多動症状スコア (表3)

注意欠陥多動性障害は、約4～5対1で男子に多い。男女別の注意欠陥多動性スコアの平均値を見ると、保護者の回答においては、男子2.32、女子2.15と、保育士の回答においては、男子2.11、女子1.61と男児の方が高かった。

### 3. 食に関する項目と注意欠陥多動性との関連

#### 1) 肥満と注意欠陥多動性傾向 (図1)

肥満の原因は多様であるが、食事内容やリズムと大きな関係があり、食育の大きな目標のひとつが肥満の予防である。小児期の肥満は、将来の生活習慣病の前駆状態となりうるだけでなく、整形外科的疾患(骨折、関節炎)の原因にもなる。

ANOVAによる比較で、注意欠陥多動性のスコアと肥満度の間有意の相関は認められなかったが、図1に示したように肥満度が高いほど、注意欠陥多動性スコアが高値になる傾向が認められた。

#### 2) 生活リズムと注意欠陥多動性との関係 (図2)

食事のリズムを整えることは、食育の大きな目標である。ADHDの子どもは、規則正しい生活をするのが困難であると考えられるので、生活リズムと注意欠陥多動性スコアとの相関を見た。図2に見られるように、生活リズムの混乱度が高いほど、注意欠陥多動性スコアが有意に高いことが明らかになった。

#### 3) 食事中のマナーと注意欠陥多動性との関係 (図3)

食事中のマナーの習得には、他人の言うことをよく聞き、食事をしながら自分の行動をモニターする必要がある。こうした行動は、表1に掲げたような行動特性を持つ子どもには困難であることが予想される。食事中のマナーが良い子どもでは、有意に注意欠陥多動性スコアが低いことが明らかになった。

#### 4) 食事中のテレビ視聴と注意欠陥多動性 (図4)

食事にテレビを視聴する子どもは多い。家族で食事をするものの大きな意味の一つに、家族間のコミュニケーションがある。注意欠陥多動性障害の子どもは、同時に複数の活動を行う傾向があるため、食事中のテレビ視聴率が高いことが予想される。テレビを見ていない子どもに比べ、テレビを時々、あるいはいつも見ている子どもは、有意に注意欠陥多動性スコアが高いことが明らかになった。

## D. 考察

今回は因子(独立変数)が互いに独立しているという過程のもとで、注意欠陥多動性スコアと、

食に関するいくつかの変数との相関関係について検討を加えた。肥満、生活リズム、食事のマナーなどが、注意欠陥多動性スコアと有意の相関を示すことが明らかになった。注意欠陥多動性障害は小児の3～5%に見られるとされている。注意欠陥多動性と、食育に関するいくつかの因子との有意の相関が、因果関係であるのかどうか、さらに解析をくわえてゆく予定である。

#### E. 結論

3～5歳児の保護者を対象に、食に関する項目と注意欠陥多動傾向との関連を検討した。その結果、肥満、生活リズム、食事の姿勢やマナー、食事のテレビ視聴と有意な関連がみられた。

#### F. 文献

- 1) Achenbach TM: Manual for the Child Behavior Checklist and 1991 Profile. Burlington: University of Vermont Development of Psychiatry, 1991

- 2) 榎原洋一、注意欠陥多動性障害 「教育現場における障害理解マニュアル」 159-171, 朱鷺書房、2002
- 3) Edmund JS et al. Varieties of preschool; hyperactivity: multiple pathways from risk to disorder. Developmental Science, 8:141-150,2005
- 4) Thompson DA, Christalis DA . The association between television viewing and irregular sleep schedule among children less than 3 years of age. Pediatrics 116:851-856

#### G. 研究発表

榎原洋一:アスペルガー症候群の最新医学⑨脳画像で分かった脳内過程 実践障害児教育 380 : 48-53, 2005

榎原洋一:アスペルガー症候群の最新医学⑩アスペルガー症候群の課題と将来 実践障害児教育 381 : 48-53,2005

榎原洋一、「特別支援教育のためのアスペルガー症候群の医学」 学研、2005

### 表1 ADHDの診断基準(DSM-IV)

#### 注意欠陥

- 学業、仕事またはその他の活動において、しばしば綿密に注意することができない、または不注意な過ちをおかす
- 課題または遊びの活動で注意を持続することがしばしば困難である
- 直接話しかけられた時に、しばしば聞いていないようにみえる
- しばしば指示に従えず、学業、用事、または職場での義務をやりとげることができない
- 課題や活動を順序だてることがしばしば困難である
- 精神的努力の持続を要する課題に従事することをしばしば避ける、嫌う、またはいやいや行う。
- 課題や活動に必要なものをしばしばなくす。
- しばしば外からの刺激によって容易に注意をそらされる。
- しばしば日常の活動を忘れてしまう。

#### 多動・衝動性

- しばしば手足をそわそわと動かし、または椅子の上でもじもじする。
- しばしば教室や、その他座っていることを要求される状況で席を離れる。
- しばしば不適切な状況で余計に走り回ったり高いところへ登ったりする。
- しばしば静かに遊んだり余暇活動につけない。
- しばしば駆り立てられるように行動する。
- しばしばしゃべり過ぎる。
- しばしば質問が終わる前に、出し抜けて答えてしまう。
- しばしば順番を待つことが困難である
- しばしば他人を妨害し、邪魔する。

#### 診断のための付帯条件

- 発達レベルに不相応
- 6ヶ月以上持続している
- 2ヶ所以上の場所で症状がある
- 日常生活上支障がある
- 7歳までに症状発現

表2 保護者の回答による注意欠陥多動傾向

		保護者		保育士	
		n	%	n	%
集中力がなく、一つの事に注意が持続しない	確かにあてはまる	121	6.7	119	6.7
	ややあてはまる	397	22.1	411	23.3
	あまりあてはまらない	829	46.2	624	35.4
	全くあてはまらない	447	24.9	610	34.6
	合計	1,794	100.0	1,764	100.0
じっとしてられない、落ち着きがない、または多動である	確かにあてはまる	167	9.3	95	5.4
	ややあてはまる	468	26.1	300	17.0
	あまりあてはまらない	718	40.0	569	32.3
	全くあてはまらない	440	24.5	800	45.4
	合計	1,793	100.0	1,764	100.0
よく考えずに行動する	確かにあてはまる	100	5.6	95	5.4
	ややあてはまる	444	24.8	288	16.3
	あまりあてはまらない	877	49.0	602	34.2
	全くあてはまらない	367	20.5	777	44.1
	合計	1,788	100.0	1,762	100.0
短気、かんしゃくを起こしやすい	確かにあてはまる	175	9.8	109	6.2
	ややあてはまる	595	33.3	352	20.0
	あまりあてはまらない	717	40.1	529	30.0
	全くあてはまらない	301	16.8	774	43.9
	合計	1,788	100.0	1,764	100.0
とても騒がしい	確かにあてはまる	204	11.4	93	5.3
	ややあてはまる	561	31.5	266	15.1
	全くあてはまらない	295	16.6	811	46.0
	あまりあてはまらない	722	40.5	594	33.7
	合計	1,782	100.0	1,764	100.0

表3 性・年齢別 保護者の回答による注意欠陥多動症状スコア

		保護者による評価					保育士による評価				
		3歳児	4歳児	5歳児	6歳児	計	3歳児	4歳児	5歳児	6歳児	計
男	n	231	254	294	169	948	229	236	293	173	931
	mean	2.28	2.36	2.32	2.32	2.32	1.98	2.08	2.13	2.28	2.11
	S.D	0.64	0.71	0.67	0.68	0.68	0.81	0.78	0.76	0.86	0.80
女	n	223	221	233	169	846	219	209	235	170	833
	mean	2.28	2.12	2.14	2.03	2.15	1.72	1.54	1.61	1.55	1.61
	S.D	0.67	0.64	0.63	0.65	0.65	0.64	0.62	0.64	0.62	0.63
計	n	454	475	527	338	1,794	448	445	528	343	1,764
	mean	2.28	2.25	2.24	2.17	2.24	1.85	1.83	1.90	1.92	1.87
	S.D	0.66	0.69	0.66	0.68	0.67	0.75	0.76	0.75	0.84	0.77

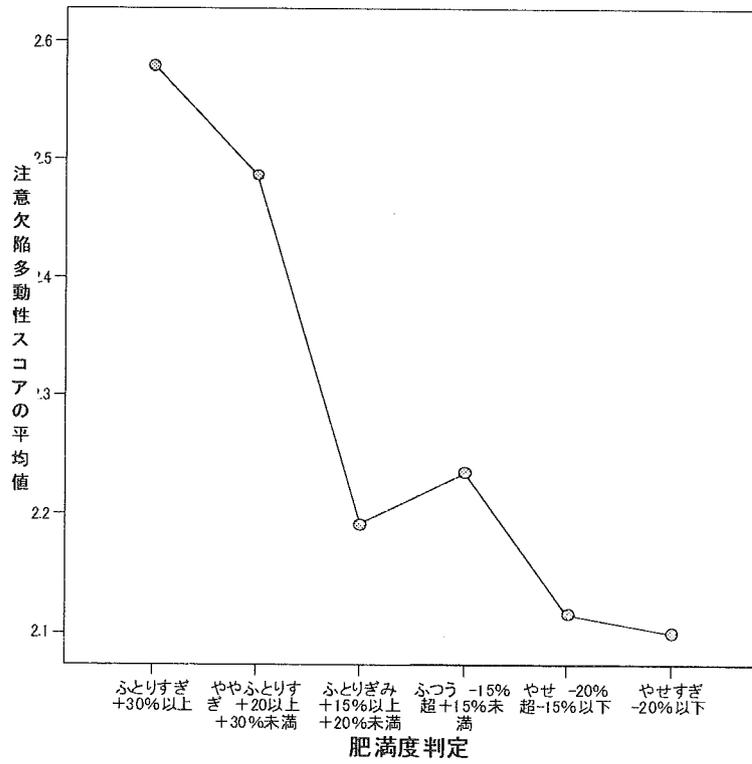


図1 肥満度判定と注意欠陥多動性スコアとの関連

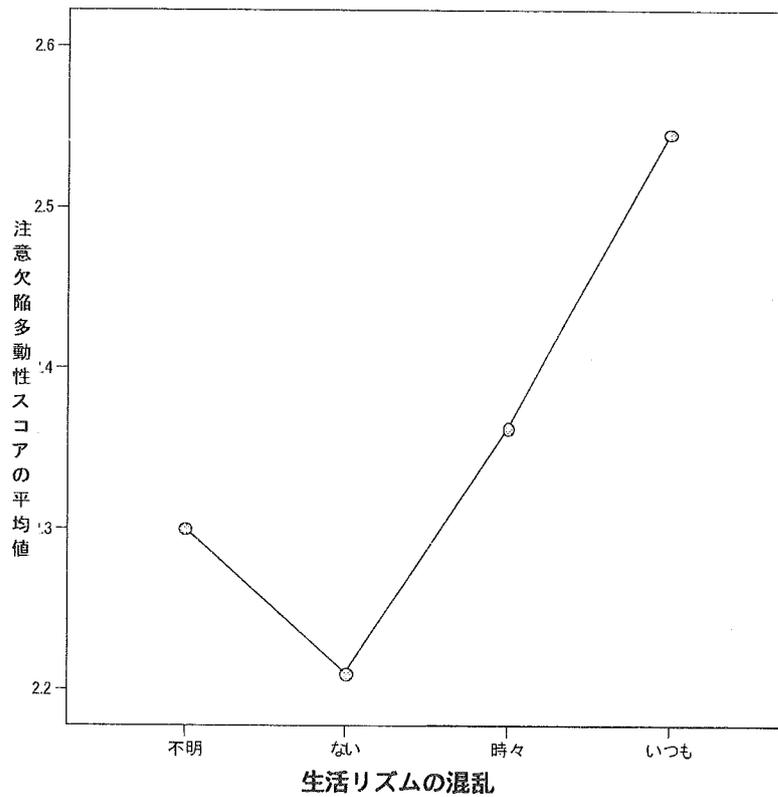


図2 生活リズムと注意欠陥多動性スコアとの関連

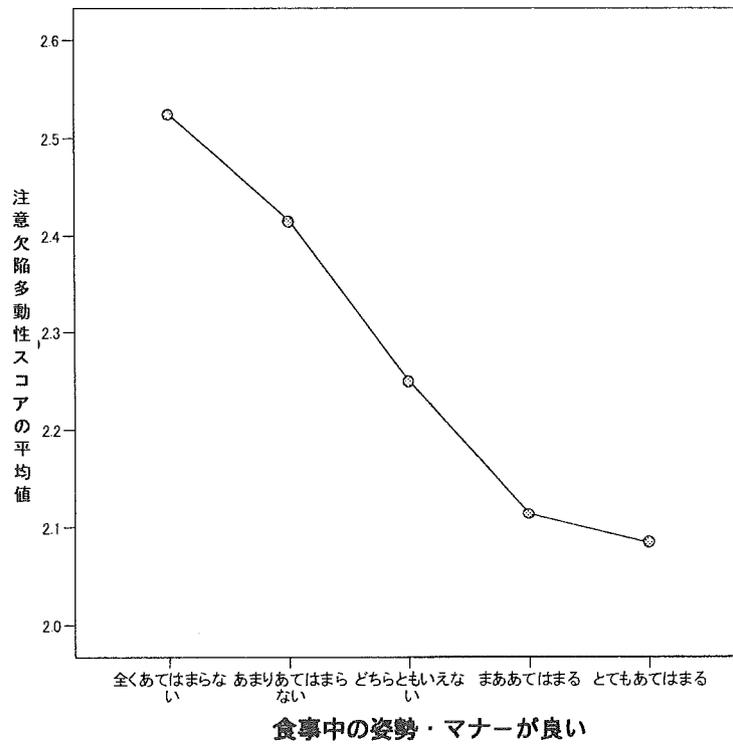


図3 食事中の姿勢・マナーと注意欠陥多動性スコアとの関連

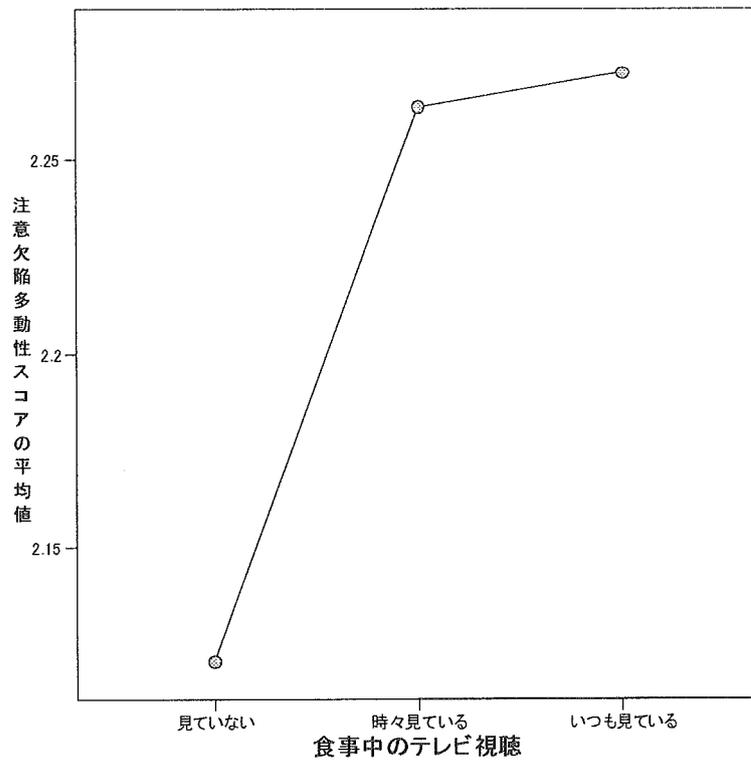


図4 食事中のテレビ視聴と注意欠陥多動性スコアとの関連

厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）  
分担研究報告書

4. 保育所での食育実践状況

分担研究者	酒井治子	東京家政学院大学	助教授
	師岡 章	白梅学園短期大学	助教授
研究協力者	外山紀子	津田塾大学	助教授
	廣瀬志保	中部学院大学	非常勤講師

研究要旨：

仙台市、川崎市、相模原市、熊本市の保育園計 402 園を対象に、園全体に関して 26 項目、食事提供面から 14 項目、発達段階別の食育実践状況 25 項目 6 年 150 項目の計 190 項目を 5 段階尺度で調査した。

調査の結果から、「食育の計画」と保育計画との連動や、職員の連携は、食育実践場面に比べて、計画及び評価の順で、連携がとれていなかった。また、栄養士・看護師の配置や地域特性によりに保育所における食育の実践状況に違いがみられ、それが食育の内容と関連があった。栄養士・調理員が「子どもと一緒に喫食する」「地域の特産物を食事に取り入れる」において実践度が低かった。高年齢児においても「給食のための食材の買い物や下準備」「調理への関わり」において実践度が低かった。子どもが調理に関わる上で衛生・安全面リスクマネジメントが十分でない。家庭との連携は、低年齢では強いが、年齢が高くなるに従って低くなっていった。地域の子育て家庭への相談や、他機関との連携は十分ではなかった。

次年度以降の介入研究を行なうにあたり、モデル園を選定し、対照公立園、対照園との比較を行ない、ベースラインを診断した。

A. 研究目的

本研究課題は食を通じた子どもの健全育成のために、乳幼児の食育プログラムを開発すると共に、その評価方法を構築することである。

そこで、本研究の目的は、保育園での体制や計画づくりを含めた食育の実施状況を把握することである。また、次年度以降、本食育プログラムを用いた介入研究を実施するにあたり、ベースライン時点での食育の実践状況とその課題を明らかにすることである。

B. 研究方法

(1) 調査対象(表 1)

栄養士配置率の高い仙台市(111 園)、川崎市(108 園)と、公立園での栄養士配置率 0% (市保育課にのみ配置) の相模原市(51 園)、熊本市(100 園) の保育園計 370 園である。川崎市と相模原市は、次年度のモデル園が所在する地域である。仙台

市と熊本市は次年度の介入地域を含んでいないものの、市独自で保育所を食育の重要な拠点として重点的に取り組みを進めており、市にとってもベースライン診断として本調査が有効である。

尚、各地域の構成人口と保育所を表 1 に示した。各市の特徴は、仙台市と川崎市はともに政令指定都市で、保育園数も 115 園である。仙台市は就学前児童人口に対して、保育園が充実しており、川崎市は幼稚園数が多いものと思われる。

相模原市と熊本市は中核市である。熊本市は保育所が多く 4 市の中で最も充実している。相模原市では幼稚園が多い。

次年度以降、食育プログラムを実施していくにあたり、対象園より、川崎市と相模原市の公立園から各 2 園計 4 園を、食育プログラムの「モデル園群」とし、他の公立園を「対照公立園群」とし、私立園も含めたモデル園以外の園を「対照園群」とした。

## (2) 調査方法(表2)

各市保育課が全園に調査を依頼し、留置法によるアンケート調査を行なった。川崎市と相模原市の分園については、本園と統合した回答が得られた。各都市の回収率は、仙台市97%、川崎市94%、相模原市100%、熊本市78%であった。回収が得られた園の、各地域の専門職種の配置状況を表2に示す。仙台市は常勤栄養士配置率が100%であった。川崎市も0歳児が在籍する園では、常勤栄養士と看護師の配置率が100%である。相模原市は、私立園において常勤栄養士配置率が高かった。

### (3) 調査項目(資料1, 資料2)

調査項目は、保育所における食育に関する指針<sup>1, 2)</sup>を参考に、園全体に関して26項目、食事提供面から14項目、発達段階別の食育実践状況25項目6年齢の150項目、計190項目を、5段階尺度(⑤とてもよくあてはまる ④まああてはまる ③どちらともいえない ②あまりあてはまらない ①まったくあてはまらない)で構成した。回答者は、園全体に関する項目を園長(所長)、食事提供面からの項目を栄養士・調理員、発達段階別の食育実践状況を各年齢別クラスの担当保育士であった。調査の枠組を資料1に示し、調査票は資料2のとおりである。

### (4) 解析方法

調査の集計には、統計パッケージ SPSS Ver.14.0 を用いた。また常勤栄養士の有無による平均値の比較を行ない、有意の検定にはt検定を、地域による平均値の差による比較の有意の検定には一元配置の分散分析(両側)を、モデル園群と対照園群、対照公立園群の平均値の差による有意の検定にはt検定を用いた。

### (倫理面への配慮)

本研究の実施に際しては、研究者と保育行政担当者との協議の上、施設長に対し、書面にて研究の主旨、方法、施設情報の保護などを説明し、施設の負担を少なくする最大の配慮を行なって実施した。得られたデータが施設などで活用できるように保育行政担当者との協議の上、結果説明や指導を行なった。

## C. 研究結果

### 1. 調査園全体の食育実践状況

#### 1-1. 園全体(表3-1)

『体制づくり』については、『職員が各自の専門性を踏まえた役割分担をしている』『食育の実践をする上で、保育士、調理員、栄養士、看護師等の全職員の連携がとれている』の評価が高かった。職務分掌ができており、かつ連携がとれているので、望ましい体制で運営がなされていると思われる。一方、『子どもが調理に関わる上で、衛生面・安全面で適切に対応できるマニュアル・チェックリストなどを作成し、全職員に周知している』は実施度が低かった。マニュアルやチェックリストができていない園もあるように見受けられる。

『計画・評価』については、子どもの実態はよく把握されていることがうかがえる。食育を軸にした、保育や指導計画、評価については、実態把握に比べれば低い実施度ではあった。評点3「どちらともいえない」と評点4「まああてはまる」の間に分布されていた。

『多様なニーズへの対応』では、食物アレルギーに関する項目の実施度が高く、ばらつきも少なかった。多くの園でアレルギーに対応した給食を提供しており、他の子どもと同じような食事になるような配慮もされていた。しかし、延長保育に関する項目の評価は、それほど高くなかった。また、『在籍している外国籍の家庭の食文化を尊重している』については、外国籍の乳幼児が在籍していないために「あてはまらない」と回答しているのか、真にまだ取り組みが始められていないのかの判断はつきかねる。

『家庭との連携』については、『保護者に調理講習会を実施している』は評価が非常に低かった。忙しい保護者に料理講習会に参加を望むのは難しいと考えられる。また、『在籍している外国籍の家庭の食文化を尊重している』についても評価は低かった。外国籍の乳幼児が在籍していないために「あてはまらない」と回答したのか、外国の食生活を積極的に理解しようとしていない姿勢ととらえるかはここからは判断できない。またこれらは、平成16年1~2月に東京都、山梨県で実施された「保育所

における食育実践調査」<sup>1)</sup>においても同様の結果が得られている。

一方、給食に関する項目の、給食だよりの発行の実施度は非常に高く、給食の展示や給食・おやつ参観もよく行われている。

「地域との連携」については、どれも実施度はあまり高くないようである。特に幼稚園や小学校との連携は、設問 26 項目のうち、もっとも低い評価であった。保健機関との連携は比較的とれているようであるが、園による差は大きい。公立園と私立園で関わり方が異なるのかもしれない。また、地域の子育て家庭への支援も、比較的实践されているようであるが、ばらつきがみられる。

#### 1-2. 食事提供面(表 3-2)

「食と健康」に関する項目は、いずれも評価が高い傾向がみられた。特に、『品質がよく、幅広い食材を取り入れて食事を提供している』は評価が高くばらつきも少なかった。

「食と人間関係」では、食事場面を見に行くことの実施度は高いのであるが、業務に追われて時間がとれないのか、一緒に食事は行なわれていないようである。

「食と文化」に関する項目では、ほとんどの園が、「あてはまる」「まあ あてはまる」と回答しており、行事や旬をいかした献立を作成していることがうかがえる。また、食器への配慮も評価は高かった。地域の特産物を生かした郷土料理を献立に取り入れているようであるが、評価は中程度で、ばらつきが大きい。

「いのちの育ちと食」に関しては、栽培野菜の献立への取り入れは高い実施度であった。

「料理と食」では、子どもの要望の取り入れも、調理を見せることも評点 3「どちらともいえない」と評点 4「まあ あてはまる」の間に分布されていた。

#### 1-3. 発達段階別(表 3-3)

「食と健康」に関する項目では、『食事前に身体を動かして遊ぶ時間を十分に確保している』『一人一人の食欲に応じて、乳量、食事量を調節している』『子どもが自分で食べようとすることを尊重している』の 3 項目は、すべての年齢において実施度は非常に高く、ばらつきも少なかった。

『食事の後にうがい、歯磨きをさせる』『栄養や健康の話をする』の 2 項目は、年齢が上がるにつれて実施度は高くなっていき、3 歳以降は評点 4 以上であった。反対に、睡眠の個人差を尊重するという点においては、年齢があがるにつれ、評点は下がっていった。0～2 歳児では実施度は非常に高かった。また『嫌いなものでも残さず食べさせる』ことが望ましいとは言えないのではないかという意見が寄せられた。

「食と人間関係」において、食事中に子どもに話しかけることは、非常によく行なわれている。0, 1 歳児と保育士と一緒に食事することはあまり実施されていないが、年齢があがるにつれて実施度は上昇していく。3 歳以降、評点は高い。子ども同士のやりとりを尊重するという点も、年齢とともに評点は高くなり、2 歳以降、評点は 4 を超えている。子どもと調理をする人との関わりをもたせることは、各年齢とも評点 3 以上で、4, 5 歳においては高い実践度がみとめられた。

「食と文化」では、あいさつをさせることの実践度はいずれの年齢でも非常に高い。しかし、『地域の特産物や伝統的な食事に興味を持たせる』ことはあまり行なわれていないようである。食具の使い方は 2 歳と 4～6 歳で実施度が高い。行事食に関心を持たせることも 4～6 歳で評価は高くなる。

「いのちの育ちと食」に関しては、飼育に関わらせることは、いずれの年齢でも実施度は高くなく、ばらつきもみられる。これは園の設備や飼育の有無と関係があると思われる。『栽培・収穫に子どもに関わらせる』『食べ物による自然の恵みに、感謝の気持ちを持たせる』の 2 項目は、年齢が上がるにつれて評価は高くなる傾向をみせ、4, 5 歳児では実施度は高かった。

「料理と食」に関しては、全体的に実践度は低い傾向がみられた。しかしその中でも、『子どもを配膳・後片付けなどに関わらせる』は 4 歳以降、実践度は高くなっている。

「家庭との連携」では、年齢が上がるに従い、実践度は低くなっていく傾向がみられた。保護者からの相談を受けたり、情報を発信したりすることは、0, 1 歳児では評価は高い。

全体に、子どもの年齢や発達度に見合った指導のもとに、実践されている傾向が認められた。

## 2. 常勤栄養士配置の有無による食育実践状況(表4-1,2)

常勤栄養士の配置の有無による平均値の比較を行なった。有意差のあった項目について表4-1, 2に示した。

### 2-1. 園全体

「体制づくり」の面では職員の専門性を踏まえた役割分担をしている点と食育実践においての職員の連携がとれるという点において、常勤栄養士が配置されている方が有意に高かった。

「計画・実行」において、常勤栄養士が配置されている方が、保育計画、指導計画、保育の評価のそれぞれに連動した食育の計画づくりが有意に実践されている。

「多様なニーズへの対応」では、園長保育に関する項目について、常勤栄養士が配置されている方が有意に高い評価であった。

「家庭との連携」では、給食だよりの発行や給食の展示は、調査園全体の結果においても高い実践度であったが、常勤栄養士が配置されていると実践度は有意に増す。保護者のニーズの把握などの、情報交換の場も常勤栄養士が配置されていることにより有意にその機会を持っている。外国籍の子どもへの対応は、全体的には実践度は高くないものの、常勤栄養士が配置されている方が有意に評価は高かった。

### 2-2. 食事提供面

「食と健康」に関する項目において、全体的に非常に評価が高かった『品質がよく、幅広い食材を取り入れて献立を作成している』という項目は有意差がみられなかった。やはりどの園でも実践度が高いと思われる。しかし、実態把握に基づいた食事計画の点、食育の一環としての給食の運営面、子どもへの栄養・健康の情報発信については、栄養士が常勤している方が有意に実践度は高かった。一方、『子どもが自ら配膳をする機会を作っている』は、常勤栄養士が配置されていない園の方が、有意に評価が高かった。

「いのちの育ちと食」に関して『子ども達が栽培・収穫した食材を給食に取り入れ

ている』は、常勤栄養士が配置されている園の方が、実践度が高かった。栄養士が配置されていることで柔軟に対応できる可能性が考えられる。

### 2-3. 発達段階別

「食と健康」に関する項目では、0～3歳の『食事の後にうがい・歯磨きをさせる』で栄養士が配置されている方が有意に実践度が高かった。また0歳児では『子どもが自分で食べようとするのを尊重する』ことは栄養士が配置されている方が有意に評価は高かった。睡眠の個人差を尊重することも5歳児では、配置有りの方が有意に実践されていた。一方、2歳児の身体を動かす遊び時間を確保することは、栄養士が配置されていない方が有意に評価は高かった。また、1歳児『嫌いなものでも残さず食べさせる』も配置無しの方が有意に実践度は高かった。

「食と人間関係」では2, 3歳児の『保育士も子どもと一緒に食事をする』では常勤栄養士が配置されていない方が有意に実践度が高かった。特に2歳児では顕著だった。この項目は調査園全体でみても3歳以上のクラスでは実践度は高いのにも関わらず、3歳児クラスで有意差が認められた。一方、『子どもに食事をつくる人との関わりを持たせる』では、2歳児で常勤栄養士が配置されている方が、有意に実践度が高かった。この項目は、年齢とともに実践度が高くなるが、栄養士が配置されていることで、配置されていない園よりも早い段階で取り組み始める傾向がみられる。

「食と文化」では、『食具の正しい使い方方を教える』項目の2, 4歳において、常勤栄養士が配置されていない方が、実践度は高かった。

「いのちの育ちと食」に関しては、『栽培・収穫に子どもをかかわらせる』の3～5歳児で栄養士が配置されている方が有意に評価が高かった。この項目は、調査園全体の結果では、4, 5歳で実践度が高くなるが、常勤栄養士配置園では3歳から実践度が高くなるようである。収穫後の調理に関わる部分で、量、質ともに栄養士が配置されている方が対応しやすいためかもしれない。しかし、『食べ物による自然の恵みに、感謝の気持ちを持たせる』は、0, 2

歳児で栄養士が配置されていない方が、有意に実践度は高かった。

「料理と食」では、有意差の認められた項目が3歳以上で多かった。『子どもを配膳・後片付けなどに関わらせる』ことは、1～3歳児において常勤栄養士が配置されていない方が、実践度が有意に高かった。これ以外の年齢でも、有意差はみられないものの配置されていない園の方が平均値は高かった。一方、『食材の買い物、下準備に子どもに関わらせる』『食材の色、形に触れたり、匂いをかいだりする機会を設ける』は、3、4歳児で、『子どもを調理に関わらせる』の3～5歳児では、常勤栄養士が配置されている園が配置無しの園より有意に評価は高かった。しかし、これら3項目はいずれの年齢においても全体的に実践度は低い。

「家庭との連携」に関しては、『保護者から食事についての相談を受ける』の0歳児と『保護者会で、保護者に対して食事の話をする』の0、2歳で、栄養士が常勤配置されている方が、有意に実践度が高く、特に0歳児ではその差は大きかった。

### 3. 地域別設置主体別(表5-1～12, 表6-1, 2)

地域による平均値の差によって比較した。また、そのうちの公立園だけを抽出し、公立園での地域差として平均値の差を比較した。

有意差のある項目のみを抜粋した結果を表5-1～12に示した。また各地域の特徴を表6-1, 2にまとめた。

仙台市は、園全体では、特に公立園において、全職員が「保育所における食育に関する指針」を認識することについて取り組まできている。また、「子どもが調理に関わる上で、衛生面・安全面で適切に対応できるマニュアル・チェックリストなどを作成し、全職員に周知している」ことも、相模原市と川崎市より有意に実践度が高かった。計画・評価の領域においても、他市に比べ、取り組みが進んでいる。延長保育に関わる項目も実践度が高かった。家庭との連携は取れているようであるが、地域との連携に関する項目では実践度は低かった。

食事提供面では、特に、公立園においては「子どもと一緒に食べる」ことの実践度が非常に低かった。

「いのちの育ちと食」に関して、栽培・収穫に子どもに関わらせており、その食材を給食に取り入れており、関連づけされた取り組みがなされている。

川崎市は、「職員が各自の専門性を踏まえた役割分担をしている」に関して評価が有意に高かったが、他市においても実践度は低くなかった。家庭との連携に関しては、実践度の高い項目も見られたが、地域との連携に関して、実践度が低いものが多かった。また、発達段階別の項目「食事の後にうがい・歯磨きをさせる」は、非常に実践度が高かった。これは常勤看護師が配置されているためと考えられる。

相模原市は、「多様なニーズへの対応」に関して、実践度が高い項目が多かった。しかし、「地域との連携」に関しては、実践度が低い。また、公立園では「評価・計画」について取り組みが進んでいないようである。

熊本市は、特に公立園において、取り組みができている項目が多くみられた。外国籍の子どもへの対応への取り組みができているようであるが、これは、外国籍の子どもが不在の園なのか、それとも実践度が低いのかは不明である。「食と文化」に関する項目での評価が高いものが多かった。

### 4. モデル園と対照公立園、対照園との比較(表7, 表8)

これまでの結果を踏まえて、川崎市と相模原市の公立園から各2園(川崎市立S保育園とT保育園、相模原市立B保育園とK保育園)を選定し、計4園を「モデル園群」とした。モデル園以外の公立園を「対照公立園群」、2市のモデル園以外の調査園全体を「対照園群」として比較を行なった。有意差のあった項目について、表7に示した。

#### 4-1. 園全体の食育実践状況

「体制づくり」の基本となる「保育書における食育に関する指針」の認識は、相模原市と川崎市は調査地域の中でも低い評価であったが、さらに、モデル園は対照公立園、対照園よりも有意に評価が低かった。

特に川崎市立K保育園は実践度が非常に低かった。

「計画・評価」の領域においても、食育の視点を含めた保育目標の設定については、モデル園は有意に对照公立園、对照園より実践度が低かった。また、仙台市と熊本市よりも川崎市と相模原市が有意に実践度の低かった『保育計画に連動した食育の計画』と『保育評価に連動した食育の評価』の点において、モデル園は对照公立園、对照園に比べて有意に評価が低かった。特に、相模原市立K保育園は上記3項目についての実践度が低かった。

有意差のあった項目すべてが、对照公立園より对照園のほうが実践度は高かったので、私立園において取り組みがすすんでいると考えられる。

#### 4-2. 食事提供面の食育実践状況

調査園全体では、概ね評価が高かった『品質がよく、幅広い食材を取り入れて食事を提供している』項目で、相模原市の公立園は有意に低い評価であったが、中でもモデル園は对照公立園に比べ、さらに実践度が低かった。对照園との比較でも評価は低かった。川崎市のモデル園の実践度は高かったものの、モデル園を平均すると低い実践度となった。

子どもに調理の場を見せているかという点においては、地域や設置主体別では有意差はなかったが、モデル園は对照公立園、对照園より有意に実践されていなかった。特に川崎市立K保育園は評価が低かった。

食器への配慮は、私立園での実践度が高く对照園で有意に評価が高かった。モデル園では特に川崎市K園の実践度が低かった。

#### 4-3. 発達段階別の食育実践状況

「食と健康」に関する領域で、『嫌いなものでも残さず食べさせる』の0, 5歳児で、对照園がモデル園より有意に実践度が高かった。『子どもが自分で食べようとすることを尊重する』の1歳児において、モデル園が对照公立園、对照園に比べ有意に実践度が低かった。しかし、4, 5歳では4モデル園全てで評価が高く、对照公立園、对照園より有意に実践度が高かった。睡眠の個人差においても1歳児で、对照公立園、对照園のほうが、有意に評価が高かった。栄養・健康の情報伝達に関して4, 5歳児

ではモデル園よりも对照公立園、对照園のほうが、有意に評価が高かった。

「食と人間関係」では、『食事中に子どもに話しかける』の4, 5歳児と、調理をする人との関わりを持たせることの0歳児において、モデル園が、对照園や对照公立園よりも有意に実践度が高かった。

「食と文化」に関して、『食具の正しい持ち方を教える』の5歳児と、『行事食に関心を持たせる』の4歳児では、对照公立園がモデル園に比べて有意に実践度が高かった。一方、『地域の特産品や伝統的な食事に興味を持たせる』の1歳児、『食事の前後の挨拶をする』の2, 3歳児はモデル園が对照公立園に比べて、有意に高かった。特に、相模原市立K保育園の実践度は高かった。

「いのちの育ちと食」では、有意差のあった6項目は全て、モデル園のほうが、对照公立園、对照園より有意に実践度が高かった。しかし詳細にみていくと、『身近な動物とのふれあいを大切にしている』の3歳児では、川崎市T保育園は実践度が低く、他の3園は非常に高かった。『栽培・収穫に子どもを関わらせる』の1歳児では、相模原市B保育園が他の3園に比べて低いものの、对照公立園、对照園よりも高い評価であった。またその3園は高い実践度であった。5歳児では、4モデル園すべてが非常に実践度が高かった。『食べ物による自然の恵みに、感謝の気持ちを持たせる』は、モデル園の実践度は非常に高い傾向であった。

「料理と食」に関しては、5項目で有意差が認められた。『子どもを配膳・後片付けなどに関わらせる』では、2歳児において、モデル園が有意に高かった。公立園における地域差では、相模原市は川崎市より有意に高かったが、川崎市のモデル園の評価は、对照公立園の平均よりも高く、市内でも実践度の高い園であるといえる。相模原市のモデル園も実践度は非常に高かった。しかし、5歳児になると、对照園のほうがモデル園よりも有意に実践度が高かった。地域別でも、設置主体別で比較しても、この項目の評価は高いものであり、モデル園3園も評価は「とてもよくあてはまる」だった。しかし、相模原市B園の実践度が